

病弱教育に関する理解促進を目的とした教育プログラム

— 「院内学級イメージ」の変化に着目して —

An Educational Program for promoting understandings of In-hospital schools

— How do Images of In-hospital Schools Change? —

谷 口 明 子*

TANIGUCHI Akiko

要約: 本研究は、特別支援教育の一環である病弱教育の理解促進をめざした授業の効果を検討することを目的とする。病弱教育場面のVTR視聴と病弱教育に関する基本的な制度・教育課程についてスライドを用いた講義形式で情報提供を行い、さらに筆者自身の研究内容を実践のエピソードを交えつつ紹介し、授業の前後にSD法によって院内学級のイメージを測定した。結果として、院内学級については存在認知以上の具体的な内容や制度的背景に関しての一般的知悉度は低いこと、院内学級イメージは授業を受けることによってよりポジティブな方向性へ、特に明るく楽しいイメージへと変化することが明らかになった。既有知識のイメージへの影響は、授業前に3項目において関連がみられたが、授業後のイメージの変容度には有意な関連は見られず、既有知識の影響は大きくないことが示された。本研究は探索的な試みであり、今後は、教育プログラム内容をより精練し、調査協力者数を増やして検討を続けていくことが課題となる。

キーワード: 院内学級 理解促進教育 イメージ変容 SD法

I はじめに

院内学級とは、文字通り、長期入院中の児童・生徒が病院内で学習する学校教育の場である。教育行政上は病弱・身体虚弱教育（以下、病弱教育とする）として、特別支援教育の一環に位置づけられている。明治22（1889）年に端を発していることから、その歴史は決して浅いものではない。にもかかわらず、病弱教育は、他の障害児教育に比しても、教育行政上も研究上も顧みられることの少ない分野であった。

近年の小児医療においては、医療技術向上による治癒率上昇から、退院後の社会・学校への復帰を念頭においた治療体制が望まれるようになった。同時に、入院児への教育的援助の必要性が認識されるに至った。さらに、保護者の要請や、入院中の子どものQOL向上の意識高揚を背景として、平成6（1994）年に文部省（当時）は「病気療養児の教育について（通知）」を出し、従来は「入院中だから…」という理由のもと教育的援助を受けないままになっていた子どもたちへの学校教育の導入が公に提唱されたのである。これを追い風として、全国の大学病院を中心に各地に院内学級が開設されている（谷口、1999）^[5]。

しかし、「院内学級」と言われて、一体どのくらいの方がその具体的な内容や状況を思い描くことができるだろうか。むしろ「そんなものあったの?」「病気なのに勉強させられてしまうの?」との驚きを感じる方が大半ではないだろうか。最近こそ、院内学級の子どもたちの詩集の出版やTV・新

*附属教育実践総合センター

聞報道の影響で、入院中の子どもたちにも教育の機会があるという事実は一般にも浸透してきた。しかし、先行研究も非常に少なく、院内学級がどのような制度下にあり、そこでどのような教育実践が展開しているのかに関する社会的認知度はいまだ低いと言わざるを得ない。児童生徒の誰もが病気になる可能性がある以上、教壇に立つ者にとって病弱教育に関する知識は必須のものと言え、教員養成課程においてどのような教育プログラムを組み入れていくのかは、ひとつの課題と言えるだろう。

本研究においては、病弱教育に関する理解促進を目的とした教育プログラム開発への第一歩として、実験的な授業実践の効果を検討する。具体的には以下の4つの仮説について検討する。

- 仮説1：院内学級の実践内容や制度的背景についての一般の認知度は低いだろう。
- 仮説2：院内学級に関する既有知識がある人ほど、院内学級に対して肯定的なイメージを抱いているだろう。
- 仮説3：講義を聴くことによって、院内学級のイメージはより好ましいものへと変化するだろう。
- 仮説4：院内学級に関する既有知識の少ない人ほど、講義を聴くことによるイメージの変化は大きいだろう。

II 方法

1 調査手続き

調査は、2008年6月に教育学専攻の大学院生 28名（男15名・女13名）を対象として行われた。調査手続きは以下のとおりである。イメージ測定に適しているとされるSD法を採用し（井上・小林, 1985）^[2]、質問紙調査を70分の授業の事前事後に行った。SD法で用いた19の形容詞対（図2参照）は、根本(1983)^[4]が学級雰囲気調査に用いたものをそのまま援用し、7段階で院内学級に関するイメージを評定してもらった。フェイスシート項目（年齢・性別・専門領域）に併せ、既有知識の程度を4段階（全然知らなかった・名前だけは聞いたことがある・ドラマや新聞等で見たことがあり多少は知っている・個人的にかかわったことがある）で尋ね、「多少は知っている」または「個人的にかかわったことがある」と回答した人にはどのような知識やかかわりをもっているのかを自由記述で尋ねた。

分析は、欠損値のある3名を除いた25名分（男13名・女12名）のデータを対象に、統計パッケージSPSS Ver.15.0を用いて行った。

2 授業の概要

授業では、『生きる力』と教育—『生きる力』を育てる教師の役割とは—のタイトルで、「生きる力」を育てる教育実践例として院内学級の教育について紹介した。まず、NHK ウィークエンドリポート「病気だって学びたい—動きはじめた院内学級」（平成5年1月9日放送）の一部を15分程度視聴し、院内学級の様子を視覚的に提示した。その上で、制度の概要・歴史的背景・教育の場・教育課程などの院内学級の制度的背景と、入院児を囲むサポートネットワークの連携に関する院内学級の「<つながぎ>機能」（谷口, 2005）^[6]の研究を紹介しながら、入院児を囲むサポートネットワークの必要性について講義を行った。

III 結果と考察

1 院内学級に関する既有知識

既有知識の状態は、図1の通りである。25名中6名(24%)が「全然知らなかった」、9名(36%)が「名前だけは聞いたことがある」、7名(28%)が「ドラマや新聞等で見たことがあり、多少は知っている」、3名(12%)が「個人的にかかわったことがある」と回答している。

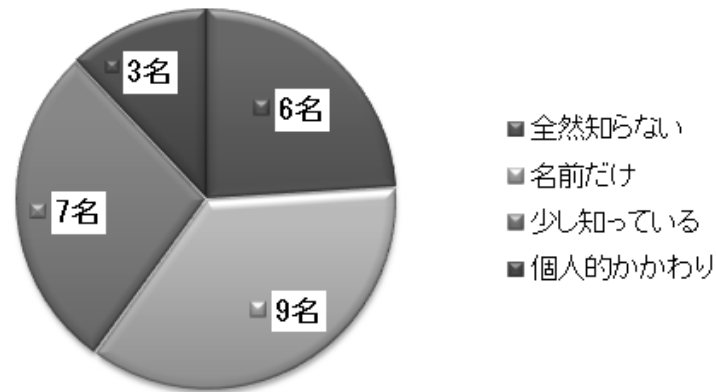


図1 「院内学級」についての既有知識

既有知識の程度に有意な性差は認められなかったが($t = 2.01$, $df = 23$, n.s.), 30歳以上の年長学生群($n = 6$)と29歳以下の若年学生群($n = 19$)には、有意な差がみられ、年長学生群のほうが多くの既有知識を有していた($t = 2.23$, $df = 23$, $p < .05$)。これは、本調査の年長学生が現職の教育職員であることから、教育について幅広い知識を有していることの反映と考えられた。

既有知識の程度と院内学級イメージとの関連としては、3項目「こわいーこわくない」「大切なーどうでもよい」「あたたかいーつめたい」の授業前イメージにおいて有意な相関がみられ、授業後イメージとは全項目有意な関連は見いだされなかった(表1参照)。既有知識があるほど、授業前に院内学級に対して、より「こわくない」($r = -.40$, $p < .05$)、「大切な」($r = -.47$, $p < .05$)、「あたたかい」($r = -.56$, $p < .01$)とのイメージを抱いていた。しかし、授業後には差がみられなくなっていることから、70分の授業を受けることで、既有知識の影響がなくなる程度の理解を促進することができたと考えられる。

しかし、19項目中3項目しか既有知識の程度との関連がみられなかったということから、既有知識の程度は、院内学級イメージにさほど影響していないと言える。「多少は知っている」「個人的にかかわったことがある」と回答した人にどのような知識やかかわりをもっているのか尋ねた自由記述の項目に対しては、次のような記述がみられた。

- ー 長期入院の児童に学ぶ場を提供すること。／病院内に開設してある教室。
- ー 体調の良いときだけ、みんなと勉強したり歌ったりする。個別にベッドで行うこともある。
- ー 『電池が切れるまで』を中心としたドキュメンタリーやドラマを見た。自分が入院していたときに、ガラスのドア越しに一見したことがある。小さめの教室に2～3人の先生がいて、学年・病気がそれぞれ違っている子どもたちに個別授業のような感じで授業をしているというイメージ。

- － 病院実習で教室内を見せてもらった(子どもは見えていない).
- － 高校入試時の試験監督として命令を受けたことがあった.
- － 息子が長期入院したときに、学校に戻ってからスムーズに学習に入れるようフォローしていただいた.
- － 生徒がお世話になりました. 学籍関係の窓口もしました.

自分の子どもや生徒が入級するなど、院内学級に対して何らかの個人的なイメージを形成するような当事者としてのかかわりをもっていたのは3名のみであった. あとは第三者的立場から比較的浅いレベルの知識・かかわりをもっていたに過ぎず、こうした既有知識の全般的な質の浅さがイメージへの影響のなさの背景にはあると考えられる.

2 授業前後の「院内学級イメージ」の変容

図2は、「院内学級イメージ」のプロフィールである. 19項目中18項目において平均が4以下であり、院内学級にはもともとポジティブなイメージが抱かれていることがわかる. これは、入院中の子どもたちへの教育の機会保障ということ自体が向社会的性質をもっており、院内学級の存在が根本的には好意的に受け止められていることを示している.

授業の前後の院内学級に対するイメージの変化は図2及び表1に示した通りである. 図2の網がけで囲みのある形容詞対は、授業前後で5%水準以上の有意差があったものを示している. 授業の前後を比較して有意な差が認められたのは8項目の形容詞であり、3項目で有意傾向が見られた. 授業を受けることで、「たのしい」「こわくない」「大切な」「うきうきした」「まじめな」「あたたかい」「しらけていない」「好きな」という一般にポジティブと判断されるイメージへと変化していることが明示されている.

表1の「既有知識との相関：前後差」の数値は、イメージの変化量と既有知識の程度との相関係数である. 2つの形容詞対「親切的な－不親切的な」($r = -.57, p < .01$), 「うきうきした－沈んだ」($r = -.41, p < .05$)において統計的に有意な関連が見いだされた. 両項目ともマイナスの相関があることから、既有知識が少ない人ほどこの2項目において大きなイメージ変化を示したことになる. 他にも統計的にこそ有意ではないが、「いごこちのよい－いごこちの悪い」「大切な－どうでもよい」に関しても－0.3以上の相関が見られ、正しい情報提供によってそれまで抱いていた暗いイメージが大きく転換したことがわかる.

イメージ変容が最も大きかった3項目は、「まじめな－ふまじめな」「たのしい－つまらない」「うきうきした－沈んだ」であった. 子どもたちが病を抱えているという特殊な状態にあることから「まじめに学習に取り組んではいけないだろう」とのイメージが院内学級の様子や教育課程の内容を知ることによって覆ること、また、授業場面での子どもたちの笑顔や雰囲気やVTRから窺い知ること、「病気」「病院」から連想される制限の多い抑圧的なイメージが払拭され、好ましいイメージへと転換するものと思われる.

唯一ネガティブ方向への変化と考えられたのが、「まとまりのある」から「まとまりのない」方向への変化であった. これは、授業内で、院内学級の子どもたちは様々な地域や学校から病気を理由に入院してきたいわば寄せ集めの集合体であり、教師たちが子ども同士の関係性をつなぐ橋渡し役をとめて人間関係づくりを援助する必要があることに触れたこと、院内学級では各々前籍校に準じた教科教育が展開していることを伝えた影響と考えられる.

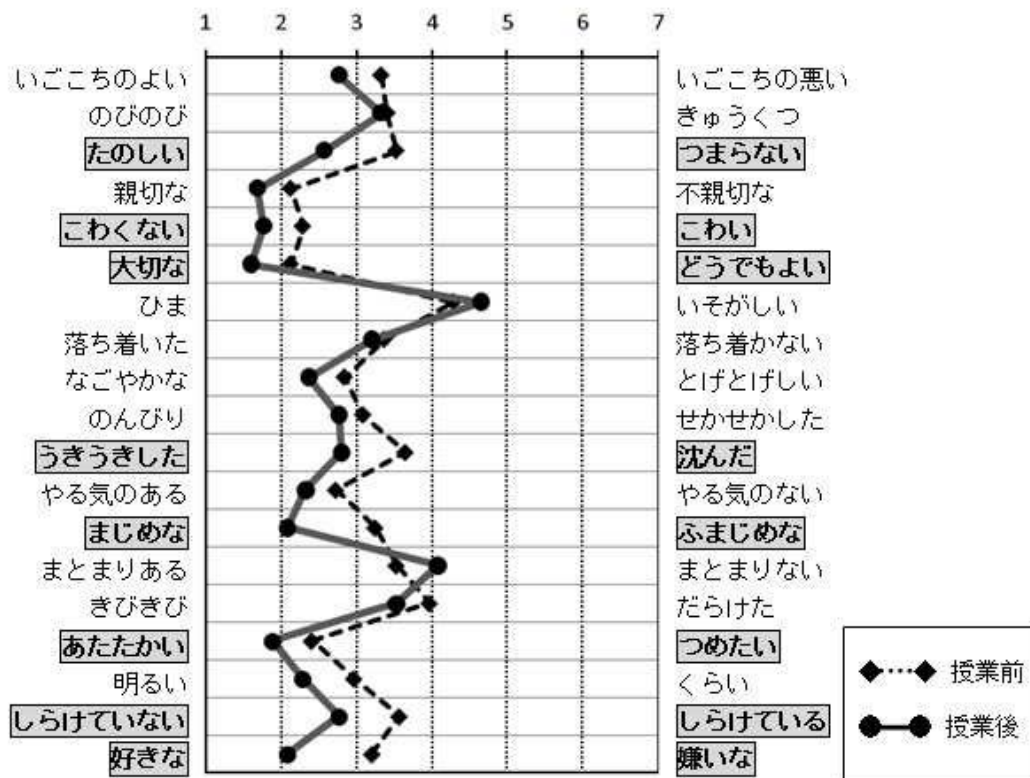


図 2 「院内学級イメージ」の変容

3 「院内学級イメージ」と性差の関連

「院内学級イメージ」の性差は、授業前はどの項目にも見られないが、授業後は「いごちのよい」($t = 2.28, df = 23, p < .05$, 男 < 女)「のびのびできる」($t = 3.01, df = 23, p < .01$, 男 < 女)「なごやかな」($t = 3.37, df = 23, p < .01$, 男 < 女)「のんびりした」($t = 2.13, df = 23, p < .05$, 男 < 女)「あたたかい」($t = 2.24, df = 23, p < .05$, 男 < 女)「明るい」($t = 2.64, df = 23, p < .05$, 男 < 女)「好きな」($t = 2.25, df = 23, p < .05$, 男 < 女)の7項目において、いずれも女性のほうがポジティブなイメージを抱いている。しかし、授業前も同様に女性のほうがポジティブなイメージを抱いているかという点、必ずしもそうではない。統計的な有意差こそ認められなかったが、「あたたかい」「明るい」「好きな」に関しては、授業前は男性のほうがポジティブなイメージを抱いている。つまり、女性のほうが授業を聞くことによって、イメージが大きく変容したことがわかる。

表 1 授業前後の「院内学級イメージ」の変容と既有知識との関連

	授業前		授業後		t 値	既有知識との関連		
	平均	SD	平均	SD		授業前	授業後	前後差
いごちのよい	3.32	1.40	2.76	1.74	1.50	-.37	-.35	-.36
のびのび	3.50	4.58	3.32	1.86	0.92	-.24	-.31	-.19
たのしい	3.52	1.45	2.56	1.47	2.49**	-.34	-.20	.31
親切的な	2.12	0.99	1.68	1.12	1.07	-.37	-.21	-.57***
こわくない	2.28	1.29	1.76	0.83	2.42**	-.40**	-.27	.17
大切な	2.12	1.26	1.60	0.95	2.26**	-.56***	-.05	-.38
ひま	4.28	1.19	4.64	1.15	-1.69	-.14	-.18	.15
落ち着いた	3.36	1.49	3.20	1.46	0.11	-.19	.17	.38
なごやかな	2.83	4.26	2.36	1.42	0.71	-.30	-.08	-.17
のんびり	3.08	1.50	3.08	1.22	0.86	-.28	-.08	-.03
うきうきした	3.64	1.12	2.80	1.07	3.76***	-.21	-.03	-.41**
やる気のある	2.72	1.17	2.32	1.55	1.15	.00	-.05	.09
まじめな	3.24	1.15	2.08	1.28	3.76***	-.10	-.02	-.08
まとまりある	3.52	1.36	4.07	1.79	-1.76*	-.05	-.14	.16
きびきび	3.96	1.04	3.52	0.99	1.80*	.09	-.03	.28
あたたかい	2.40	1.17	1.88	0.89	2.27**	-.47**	-.06	-.29
明るい	2.96	1.40	2.28	1.30	1.93*	-.09	.08	-.07
しらけていない	3.56	1.03	2.76	1.42	3.34***	-.21	.08	-.26
好きな	3.20	1.07	5.81	1.10	4.48***	-.13	-.2	-.23

* = $p < .10$ ** $p < .05$ *** = $p < .01$

IV まとめと今後の課題

本研究では、病弱教育に関する理解促進を目的とした実験的授業の効果を以下の4つの仮説のもと、院内学級イメージの変容に着目して検討した。院内学級について「全く知らなかった」「名前だけは知っている」を合わせて全体の60%を占め、「院内学級の実践内容や制度的背景については、一般の認知度はまだ低いだろう」という第一の仮説と整合する結果が得られた。

第二の仮説に関しては、既有知識があるほど、授業前にはより「こわくない」「大切な」「あたたかい」といったイメージを抱いているものの、その他の項目については既有知識の程度とイメージとの関連は見られず、授業後のイメージと既有知識との関連は全く見られないという結果が得られている。以上のことから、「院内学級に関する既有知識がある人ほど、院内学級に対して肯定的なイメージを抱いている」という仮説は必ずしも支持されなかった。今回の研究協力者の既有知識が、当事者という立場からの深いレベルの知識ではないことが、その背景にはあると考えられる。

第三に、教育の効果であるが、図2から明らかなように、院内学級のイメージはもともとポジティブなものではあるが、講義を聴くことによってよりポジティブなものへと変化している。「病気」「病院」という暗いイメージで受け取られがちであった院内学級のイメージが、映像視聴と基本的知識提供によりポジティブなイメージへと変化したと推測できる。また、今回は大学の講義という形で情報

提供が行われたことの影響も否定できないだろう。社会心理学の態度変容理論によれば、権威や専門性を背景とする情報は情報の受け手にとって信憑性が高いと判断され、高い説得力をもつことが知られている（Hovland & Weiss, 1952 ^[1]；是永, 1997 ^[3]）。病弱教育を専門とする大学教員による講義ということで、よりポジティブな方向性への牽引力が働いたと考えられるだろう。

最後に、「院内学級に関する既有知識のない人ほど、講義を聴くことによるイメージの変化は大きいだろう」という仮説について検討する。一般に聞き手の属性として知識のないことは態度変容を招きやすいとされるが（是永, 1997）^[3]、本研究の結果からは、一部ではあるが既有知識の程度とイメージ変化との間に有意な関連が見出された。しかし、逆に既有知識があるほどイメージが変わっている項目もあり、本仮説は部分的に支持されるに留まった。既有知識の深さを加味した分析が求められよう。また、本研究のテーマである「院内学級」がもともとポジティブに捉えられていることから、天井効果が生じ、イメージの変化を把握しきれなかった可能性がある。イメージ把握の方法についても再検討の必要があろう。

本研究は、25名という少人数クラスへの探索的試みである。より多様な協力者からのデータ収集や授業プログラム内容の精錬、用いる形容詞対についての再考など多くの課題を残している。教職課程において病弱教育への理解促進教育をどのように展開するのか、今後の研究の展開が待たれる。

参考文献

- [1] HOVLAND, C.I. & WEISS, W., The influence of source credibility on communication effectiveness. *Public Opinion Quarterly*, 15, 635-650, 1952
- [2] 井上正明・小林利宣, 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. *教育心理学研究*, 33(3), 253-260, 1985
- [3] 是永論, 説得の技術. 橋元良明(編) コミュニケーション学への招待. 大修館書店, 1997
- [4] 根本橋夫, 学級集団の構造と学級雰囲気およびモラルとの関係. *教育心理学研究*, 31(3), 211-219, 1983
- [5] 谷口明子, 日本における病弱教育の現状と課題. *東京大学大学院教育学研究科紀要*, 39, 293 - 300, 1999
- [6] 谷口明子, 入院児への教育的援助. 東京大学大学院教育学研究科博士学位論文(未公刊), 2005